令和7年度 富山市立水橋西部小学校

天瀬っ子

学校だより１月

子供の発達課題と大人の役割

特別支援教育コーディネーター 小幡 裕一

新年、明けましておめでとうございます。本年も引き続き、本校の教育活動へのご理解とご協力を賜りますこと、よろしくお願い申し上げます。

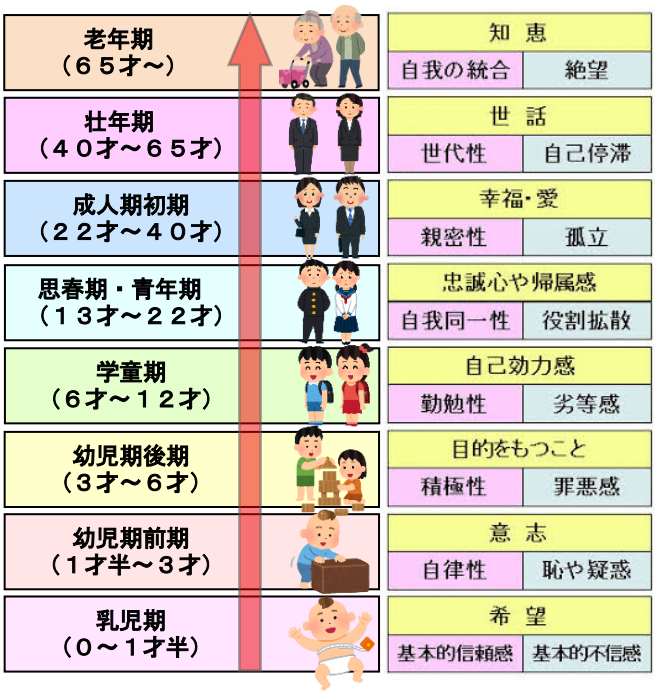
さて、私が本校で特別支援教育コーディネーターとしての役割を担い２年目となります。特別支援教育は、「すべての子供たちに学ぶことの喜びとやりがいを！」を理念として、教育環境や校内体制を整えていくことを目標としています。水橋西部小学校の子供たちは、とても優しく、寛容な子供たちが多いなぁと感じます。一方で一人一人に目を向けると、学びへの難しさを抱えている子供も少なくはなく、個別の配慮や支援が必要であることも感じています。

アメリカの発達心理学者エリクソンは、人間の一生を8つの段階に分け、各段階で直面する「発達課題（危機）」とそれを乗り越えて獲得する「力」を示しました。これは、今の時代にあっても、人生の意味や価値を振り返る指針となっており、特筆すべきことは、人間は、死ぬまで課題と向き合い精神的発達を希求しているということ、そして、いつでも課題への学び直しができるという考えに基づいていることです。

自分では何もできない状態で生まれてきた「乳児期」、周囲からのお世話を受けることで「人への絶対的信頼感」を獲得していきます。そして、「わたしがやる！」が口癖になる「幼児期初期」、失敗を克服し成功体験を重ねることで、「自律性」を獲得します。さらに、子供同士の交流が広がる「幼児期後期」、自己主張をすると同時に、目的をもって行動する「積極性」を獲得していきます。

では、小学校に通う学童期の子供たちは、どのような発達課題と向き合うのでしょうか。一言でいえば、努力し、失敗を乗り越え、成功体験を積み重ねていくことで、「やればできる」という「勤勉性」を生きる力として身に付けていくのです。逆に、「他の子と比較して、自分にはできないことが多い」と感じたり、周りから責められたりする経験が多いと、失敗しても頑張ろうという気持ちを失い、「劣等感」を抱くようになると言われています。

「自分も捨てたもんじゃない」という自己効力感は、こうした子供の努力と失敗と成功の中から自らつかみ取っていくものなのでしょう。子供に何を与え、何を考えさせ、何を支えてあげればいいのか・・・。私たち大人の役割を考えたとき、私自身一人の親として、そして教育者として、悩みながらの毎日です。



▲ エリクソンの発達課題理論